

# 幼児教育の文化性 三

— 講習筆記 —

倉橋惣三

## 目次

第一 序論

第二 道徳教育

第三 宗教教育

第四 藝術教育

## 第三 宗教教育

道徳教育の事は、教育に於て最も大事な基礎的な問題でありまして、昨日考へました様な事以外に、色々考ふべき事が

宗燧の燧育の關料に據きまつては、聖儒の考へて見ますると、非常に深い關係にある、密なる關係にあるを辯じてお  
 限つて考へるのひまはなからぬ。

蘇本の考へてはむひやうては、聯合の實際、世に云え意和で、姓圖の實際はむひやうて思はれ云え意和で、いつか實  
 たるまはぬ。宗燧に云えもの燧育に云えものこと、さう云え關料に云えものひまら云え蘇本の考へて……總しての  
 宗燧の燧育に云え事のこの關料自らで、姓圖に於けるその問題で、いつか限つて圖限つてハ、キリ考へて置かなければ  
 なからぬ。ちがは姓圖に於ける燧育の關料に於ては、この問題が、ハ、キリ考へて置く必要があると思ひます。

○

ちがはつての問題を考へるに據きまつて、先づ一觀音辯の意に、論承映の事を、念の發見直つて置くにむひやうな事  
 まつては、夫類の人縁最高の文に於ては宗燧に云え問題を故蘇考の中に於ける離つて思はむらなはるまつて。

この蘇蘇蘇園の中にお目印を置くてお思はむらなはるまつて。將して一番際の中上をまつて蘇が具合で、燧育自良の  
 けあはるまつて、まつて宗燧に云え蘇が文に於て非常の辨限が一或つて蘇を論へて思はむらなはるまつて、さう云え風は  
 ち、善知なる卦辭に云え文の莫然なる事であるまつて、ちがは蘇蘇に云え式にさへも蘇つて蘇を論へて思はむらなはるまつての  
 番際をこは蘇束まつて蘇が具合で、蘇蘇園に於ける自育目的が、祖師蘇蘇蘇式面に於ては、蘇蘇なる自良の蘇蘇  
 ちがは、その次に何を辨出つても蘇が具合のひまはるまつて、宗燧燧育に云え問題を考へて見よと思ひます。ちがは  
 ちがはつて、そのひまはる、平日の蘇蘇蘇一觀土の置かむらなはるまつて。

しつちちちちちちちちちちちち出つて考へるに云え蘇が事なまつて、あとのちがは蘇蘇燧育に合流して來る蘇蘇  
 ちがはのひまはるまつて。將して一面を認めます、蘇蘇燧育に云えこと、人間燧育の全體に直つて思はむらなはるまつて、蘇

ます。云ふのは、教育と人生とは言ふ迄もなく切離せない關係を持つて居るものである。その人生と宗教とが、又最も密なる關係を持つて居るものであるとしますれば、自然、教育と宗教とが決して別個な反對的な問題と云ふ様な譯のものではないのであります。従て他の國に於きましては、宗教と教育と云ふものが非常にしつくりと結びついて居る場合も尠くないのであります。殊に教育と云ふものが段々盛になつて來ましたそのもの歴史を遡つて見ますれば、宗教と教育との關係は事實の上に於きまして非常に密なのであります。所がそれは、宗教と云ふものとの教育と云ふものとの關係でありまして、さうも世の中の事は、さう云ふ様な根本の理論と言ひますが、本質通りには運び難いのであります。云ふのは、若しもその人生に於ける宗教と云ふものが誰れにも同じ一つのものであるならば、それで簡單なのですが、宗教と云ふものゝ本質がさうであるかは別としまして、この世の中に存在して居る宗教事實と云ふものは、社會的に存在して居る宗教事實と云ふものは、御承知の通り極めて區々であります。種々であります。甚しきは、片つ方が片つ方を宗教でないこと攻撃したり、否定したりする程種々であります。すべて世の中の事は一すじには行きませぬものでありますから、驚きもさせぬが、殊に宗教と云ふものが、その人にさりましたは所謂本當に命がけのものでありますので、そこで、色々あると云ふ丈のあつさりした話でなく、それが非常に激しいぶつかり合ひをして居るのであります。ぶつかり合ひと云ふ事を更に宗教の實際に於て申しますならば、自らその宗派へ、何も他の意味ぢやありませんが、本當のものをみんなに與へ度い爲に、その宗派へみんなを連れて來よう云ふのは當然の事であると思ひます。自分が或宗派を信じて居り乍ら、他人には他の宗派を信じなさい、云ふのは、あり得可からざる事であります。自分はコーヒーを飲みます。あなたは紅茶をお飲みなさい——それは勝手ではありますが、宗教教育はそんなにあつさりした譯に行かぬ本質があります。それだけならまだいゝのであります。それがもう一つ實際に於ては、當然相手を斥ける云ふ傾向も起つて來ます。斥ける爲に斥け

る云ふ、あの世間にありますやり方は、下等下劣なる態度でありますけれども、斥ける云ふ言葉がおかしいが、詰り自分の方が本當ならば、他の方は少しく本當でない云ふ事は當然な譯であります。斯う云ふ事は宗教そのものは別で、人間が社會で宗教云ふものを持つて居ります時に起つて來る實情でありますので、こゝの所で、宗教と教育と云ふものは遺憾乍ら一緒になれなくなつて來るのであります。教育と云ふものは、これは世の中に本當の事は一つしかない云ふ考で行く性質のものであります。又その一つの事が、人間全體に共通に普及さる可きである云ふ事をもこゝしてやつて居るものであります。

そこで、宗教がさう云ふ事になつて居りますので、教育はその宗教とピッタリつく事が出來難い。少くも難しいのであります。殊に教育と云ふものゝ本質がさうであります上に、現代に於ける教育は盡く國家を主體として、國家をその目的として、即ち教育と言へば國家的なものであるものであります。その國家的と云ふ事は、言ふ迄もなく國家的内容の如何に拘らずみんなが統一される……と言ひますか、斯くも離れぬにならない事を以て國家的と云ふ言葉の重要な意味と致します。そこで、愈々以て宗教的にその事は尊い事でありませう。たゞ如何に尊い事であらうとも、國民が色々に分れる云ふ傾きになります事は……而もそれが流行で色々な着物の色を分ける云ふ位の事なら何でもないのでありますが、生活の本質的な立場に於てさうなつて來る事は、これは國家と云ふ立場から、相容れ難い事であります。さう云ふ結果としまして、愈々茲に、宗教と教育と云ふものはさうも一緒に行き難くなつて來るのであります。皆様にこんな知れ切つた事を申上げる必要もありませんが、若し或國家が、その國の宗教即ち絶對國教と云ふものを持つて、その國教に依て統一致して居ります場合には今申上げた様な問題が、比較的樂になつて參りますが、そう一定することは出來ません。

斯う云ふ事を考へて來ました時に、例へば我國に於ける宗教と云ふものは、さう取扱はれて居るか、我國には、國の祭

云ふものは御座います。この點に於て國民は皆一つでありませんが、宗教を信する云ふ所謂信教云ふ事になります。云ふに、御承知の通り憲法に於て全く自由が許されて居りまして、各人が信教上自由であるのであります。この事はつまり色々な宗教に於て分派が出来て少しも差支ないのであります。日本國民の中に佛教を信する者あり、キリスト教を信する者あり、その各宗教の中でも色々又細かに分れた派を信じて居る云ふ事は、國民的統一としてはおかしな様であります。日本は、國民がそれぞれの宗教を信する位の事で、國家的統一は毀れない云ふしつかりした立場に於て、信教の自由は許されて居る譯であります。斯う云ふ場合に於きましても、我國の教育の中に、宗教云ふ問題が一緒になつて来ない方が、兩方の爲に都合が好い事であることは言ふ迄もないのであります。又、さうするのが當然の理論であるのであります。此所をよく御承知を願つて置き度い。即ち日本國家は、國民が宗教を信する事を嫌ふさか、反對するさか斥けるさか云ふ精神は何所にも發表されては居りませぬ。然し乍ら教育に於ては、日本の教育は、みんなを一つに教育して行かう云ふ立場なんでありませぬ。その一つに教育しようとする立場に、各自の信仰を許す云ふ立場に、これを一緒に：：所謂ゴツチャにしましては、實際上に種々な面倒な問題が起ります。のみならず理論根本に於きまして相容れない事である云ふ事は明かであると思ふのであります。これは、それ丈の話であります。

從て、斯う云ふ事が、實際問題として現はれて参ります。即ち日本に於ける教育は、その中に宗教を、その宗派に於て取入れる事を許さないのであります。これは、私が申して居ります丈の言葉の意味でありまして、教育者その人に或る宗教が影響を與へてそれからその人が教育をする云ふ事に於て、もさより差支御座いませぬ。差支ないさころぢやない、それは寧ろ貴い事さ考へるのであります。これはもさより禁するの何の云ふ話ぢやありません。更に又、或宗派へ教育して行く云ふ事は許さないさ申しましたが、その先生が持つて居ります宗教の信仰が、宗教云ふ範圍に於ては、宗教

ミ云ふ本質に於ては恐らく意識するミ否ミに拘らず生徒をそこへ持つて行き度いものであらう事は、これは否む可きでないのであります。即ち、先生が御自身さへも信じてお出でになる——いゝですが、御自身さへも、信じてお出でになりま  
す宗教、これを以てみんなに適用して、みんなを其所へ連れて行かうミ云ふ事は、これは當然な考であると思ふのであり  
ます。然しそれは、宗教ミ云ふ範圍内に於ての、宗教ミ云ふ本質内に於ての心持でありまして、教育ミ云ふ實施實行、そ  
の上に、それをさうあからさまに出していかぬ。ミ云ふミ、コッソリやればいゝミ云ふ響が、御座いますが、あからさま  
かコッソリミか云ふのでなく、それがその教育の傾向を、教育ミ云ふミころで束縛して了ふ様な形になる事は許されない  
のであります。即ち、ひろやかなる根本の心持に於きましては、さう云ふ氣持を先生が持つて居りますから、そこから色  
色の事が自ら出て来る。これは、當然ミ言ひませうか、自然ミ言ひませうか：：それ位教育の中へ意識的或は無意識的に  
盛込んで来て、人間を人間ミして、國民ミして、教育するミ云ふ様な事よりも、その宗派へ持つて行くミ云ふその努力、  
その計畫が主になつて實現して来るミ云ふ様な事は許されないのであります。

斯うした意味に於きまして、我國の教育は、所謂宗教ミ教育ミを分離致して居ります。その宗教ミ云ふのが、宗派ミし  
ての宗教であります。世にある宗教であります。念の爲に又言葉使ひで注釋を加へますが、宗教ミ言つて居ります時は二  
つの使ひ方があります。宗教學ミか哲學ミか云ふ様なもので宗教ミ云ふ事を言つて居ります時は、これは非常に廣い本  
質的な意味に於ての宗教そのものを言ふのであります。人生の事實ミしての宗教ミ云ふのは、或宗或派、さう云ふ形を  
持つて居るものを言ふのであります。唯心の中に誰かが持つて居る宗教ミ云ふものは、宗教的なもので、宗教ではな  
いのであります。これはまあ言葉の使ひ方で、宗教ミ云ふものがあつて、宗派になるミ考へて宜しいし、又宗派の形に於  
てあるものこそ社會的ミしての宗教であつて、心の中だけにあるものは、宗教的な生活態度に他ならぬミ斯う見ても宜

しいのであります。

そこでまあ兎に角我國に於きまして、宗教ニ教育ニは分離致して居ります。所がですね、これだけの事を……御承知の通りの事を改めてハッキリ申して置きました、その上でのお話であります。まあ用心深く申しますれば、私が此處で如何に宗教教育の問題を取り出しましたも、我國の教育を宗教ニ一緒にしてはうご云ふ、さう云ふ根本的な事を少しも意味して居るのでないご云ふ事は、ハッキリ御承知を願つて置き度いのであります。それを御承知願つた上に於きまして、御承知願ふもの願はぬものが決つて居るのであります。その決つて居る上に於きまして、次の問題が起つて來るのであります。

○

その、次の問題ニは何であるかと言ひます、教育ニ云ふもの、人間普遍及び國民的統一性、斯う云ふものを宗教が損つて來る危険に對しましては、今申した様な態度を、昔から日本の教育は取つて居りまして、今日も少しも方針は變りませぬが、併し人生ニ宗教ニ云ふもの、關係を熟々考へて見て、教育が本當に狙つて居りまする人生ニ云ふものを、最も深い所で問題にして行きます國民教育の實際の中へ、宗教の現實が影響して來る事は、何所迄も弊害がありますから許しませぬけれども、その極く本質的な根本的な意味に於て、教育ニ宗教教養ニが全く切離されて居る事がいゝんであらうかごうか云ふ問題は、これは又別の考慮になつて來るのであります。今日誰もが、宗教ニ教育ニの事實上に於て分離して居ります事を、これを合致してはうご主張して居ります者はありませぬ。ありませぬが然しさう云ふ風な意味で、宗教ニ教育を分離した爲に、日本人の人生ニ云ふものから宗教ニ云ふものが、切離されて了ふごしたら、これは果してそれでいいんだらうか。斯う云ふ問題が新たに起ります。その問題からしまして、文部省は、宗教に關する新らしき訓令を出して

居るのであります。その訓令は、さう云ふ意味かミ申しまするならば、これはあの宗教に關する教育上の訓令が出ました時に色々研究され、論議された事でありますが、皆様は特に氣をこめて御研究にならなかつたミ思ひますが、その時の色々な議論は、自ら二様の見方があつた様であります。

一つは、その訓令に於きまして、宗派的教育を……宗派的宗教教育を改めて禁じようとする爲にその訓令を出したんである、斯う云ふ解釋もありました。これはです。二つの點から、さう云ふ解釋が出るのも尤もだと思はれるのであります。一つは、その訓令なるものを讀みます云ふに、宗教心を養ふ事は極めて大切であるが、宗派に即しての教育はいかぬ云ふ事を更めて強く言つて居るのであります。宗教心の根本の教育を極めて必要であるミ説くミ同時に、直ぐそれミ切離せない下の句の様な具合に、然し一派一宗の教育をする事はいかぬ云ふ事を言つて居るのであります。そこでその言葉が相當に強くなります。唯いけない云ふ丈ぢやなくて、下の句に重きを置いたミすれば、其方が大變強くなつて參りますので、そこでさう云ふ訓令が新たに出されたのだミ云ふ讀み方も出来る譯であります。

然らば、元來が宗教ミ分離して居ります我國の教育に於て、何が故に今更さう云ふ訓令を出すか、何が故に今更さう云ふ訓令が出たかに就て、今の解釋をする人は、斯う見るのであります。何も今更さう云ふ訓令を出す必要はない筈である。然し乍らさつき私が一寸申しました如く、宗教ミ教育を分離はしたが、日本人の人生ミ宗教の分離を憂ふるものが澤山出まして、その結果ミして、何ミかして教育の中へ宗教を取入れて行き度い、宗教ミ教育ミを結びつけ度い云ふ考が、近時盛になつて來たのであります。その結果、宗教ミ教育の分離その事を非難する、反對する意見さへも出て來たのであります。

そこでさう云ふ議論、意見に對しまして、改めて、それはさうであらうが、そこは一應の理解がある事であるが、然し



何れにしても宗教の一派を教育を結びつける事は相ならぬ。斯う云ふ事を改めて警戒すべくあの訓令が出た。斯う解釋する人もあります。斯う云ふ事も、解釋の良し悪しを云ふよりも、確かにさう云ふ事もあの訓令から吾々は汲取る……又氣を付ける可き問題であるに相違ないのであります。然し考へて見まするに、まあさう云ふ様に先廻りして注意深く警戒する意味であの訓令を出すに云ふこともあつていゝでせう。けれども然し、宗教を教育との分離は、國の永い掟なんでありまして、何も今更それだけの爲にそんなに訓令を新たに出す必要もない様であります。して見るに、矢つ張りあの訓令の本旨は宗教を教育を分離しては居るけれども、宗教心そのものとの關係に就て、日本の教育は、反對したり否定したりして居るものでない。だから宗教の一派を結びつきに云ふ、宗教の一派で教育をして行くに云ふその狭い云ふ弊害、狭くなる弊害さへ注意すれば……ぢやない、それを注意した上で宗教心と人生との關係の本道を教育の心の中に入れて行く事は、これはいゝ事であるに云ふ事を注意する爲の訓令であるに斯う解釋して宜しいし、其方の解釋の方が本當ぢやないかと思ふのであります。即ち言ひ換へまするならば、宗教の一派を教育の結びつきは前から禁じて居り、今日も禁じて居りますが、それを直ぐに宗教的なる生活態度と人生との關係の遮断に迄持つて來て了ふのはいかぬぢやないか、宗教の一派に生徒を連れて行くに云ふ事でなくして、宗教的なる人生教養に云ふものは全然出來ない譯のものではないぢやないか、斯う云ふ事であると思ふのであります。

そこでこれ等の事は皆様には一種の法令的問題でありまして、餘り關心を持たれない事かとも思ひますが、詰りさう云ふ譯で今日は一般の識者がさう云ふ意見を立てますのみならず、兎に角そのものが、宗教心の人生價值、宗教心の教養の教育に於ける必要意義、さう云ふ風なものを認識し來つて居るのであるに斯う申し得るかと思ふのであります。その意味で私はこの問題を取扱はうと思ひます。假に宗教教育に云ふ言葉を使ひますが、これは例へばキリスト教の、或は佛教

の日曜學校に於きまして、所謂學校教育、教育法令に依てやつて居るのでないあの施設に於きまして、子供を呼んで來てその宗教を教育する、これは幾らなすつたつて別に文部省が云々すべき問題では今のところはなないのでありまして、その宗教の爲に子供を呼んで來てその教育をなさる日蓮宗教育、眞言宗教育、メソヂスト教育、キヤソリック教育、斯う云ふ風な意味のある日曜學校でやつてお出でになります宗教教育の事を此所で言ふのはありません。此所はご迄もお互國家の教育法令の下に動いて居ります教育の問題を致しまして、そこで言ふ所の宗教教育、或は宗教的教育と言ひますか——教育の中に取り入れらる可き宗教の何ものか斯う云つた様な言葉が適當かも知れない云ふ程の意味で申すのであります。

そこで、さうお話をして來ました順序上、その所謂宗教に關する訓令の極く概略を申上げて置き度いと思ふのであります。これは皆様のお読みになつて御承知であり、又これからは非一應お読み願ひ度いと思ひますが、その訓令をすつ順序を追つて讀む様に此所でお話をして行く事は出來ませぬけれども、その訓令の要旨云ふものは、幾つかに列擧する事が出来ると思ひます。

その第一は、——私は訓令の言葉や訓令の箇條に即しては申しませぬで、その心持を解釋して申しますが、——今申上げました通り繰返して申しますが、人生に於ける宗教の價値を認識して居るこゝ、これが一つ。宗教は迷信である、宗教は誤りである、宗教は馬鹿な事である、不都合千萬な事である云ふ様な認識でなく、宗教云ふものゝ人生に於ける尊き、價値を認めて居るのであります。

又第二に、その必要も認めて居る言へます。但し必要を認める云ふ點になります云ふこゝ、所謂宗教家が宗教の必要を認める程に限定された意味ではありません。もう少し廣義な意味で必要を認めて居るのであります。これが第一。

第三には——これが特に大事な點だと思ひますが——子供の心の中に、宗教的なる情操が持たれて居るに云ふこと、子供の心の中に宗教的なる根本情操が持たれて居るに云ふ事を、事實の上で認識致して居ります。——まあこゝ等のところ、甚だ細かい問題でありますから、私も言葉を細かく使ひますが、事實の上で認識して居ります。その、事實の上で認識して居るに云ふのは、さう云ふ譯で態々事實の上でなんに云ふ事を私が言ふか云ふ事を注釋致しますと、児童心理學なり又宗教心理學なり云ふ様な純學問の上では、疾うに斯う云ふ事を認めて居るのであります。そこでこの訓令が、その疾うに認めて居ります學説を、その儘繰返して居る、それだけならば私の今言つた様な面倒な言葉遣ひをしなくて宜しい。所がさうぢやなくて、訓令は學問でありませぬし、心理學で宗教學をこくものではありませぬから、さう云ふ意味でなく、さう云ふ心理學的理由であらうとも、或は心理學的ぢやないけれども家庭の影響であらうとも社會の影響であらうとも：宜しいですか？さう云ふ心理學とか、宗教發生心理學でこの問題を取扱ひます時は児童の、人間本性の中にさう云ふものがあるに云ふ意味で理論的に説くのであります。

所がその理論的に出て來たものも事實になりますが、假に児童の心理的本質の中に、宗教的なるものがあらうさながらうも、内に宗教があれば、それを自ら受けるぢやないか。社會にお寺があり、教會があり、宗教行事があり、そこから自ら受けるぢやないか、これが事實であります。

そこで兎に角兒童は、心理學的本質に於て社會に位して居ります。この宗教の存在して居ります我等の社會の中に位して居ります結果、宗教的なるものは、事實上兒童の心の中に持たれて居るのであります。幼稚園に來る途中、お寺の前を通ります。お坊様に會ひます。教會の鐘を聞きます。出がけにお母様がお燈明を上げ、佛壇を清めていらつしやるのを見る事があります。それ等のこゝは、兒童に云ふものゝ心理的本質に宗教があるかないか云ふ事は暫く別問題として、



大なる事をなしたかき云ふ事を是認するのであります。歴史に現れた宗教の偉大さを是認するを申して宜しい。親鸞上人、法然上人、日蓮上人其他日本の歴史に於きましても、時に政治家、軍人等の偉大さに較べて、歴史の表面に上つて來ました傾きもある風であつた。その宗教的精神を云ふものゝ存在を認めます。或は種々の世の中に起りました事件の中で、それが、もごが何であつたらうかき云ふ時に、宗教の影響に依て起つた云ふ事をハッキリ認めます。これが訓令の中にある様であります。さうハッキリ書いてはありませぬが、それを基にしての種々な事が説かれてある。斯う云ふ事を認めまして、それを基にして、所謂宗派の教育にあらざる宗教的教養の問題に發展さして行かうとして居るのが、あの訓令の精神であります。

○

そこで私は斯う云ふ事を申上げて、この一をきを切らうと思ひますが、この私の意味での宗教教育を考へて行きます根據としては、…基本としては、三つの事がお互に持たれて居なければならぬのであります。それは、自分が宗教を信するに否に拘らず——一寸言葉を叮嚀に使ひませう。——信するに否に拘らず云ふのは、結論的響きを持ちますが、人生の事をさう早く結論も出來ませぬから、今、信じて居るに否に拘らずと言つた方がいゝ。信するに否に拘らず云ふのは、絶對的に斷定を下して了ふ様な響きがありまして、人間が使ふ言葉としては少し生意氣であります。少し道斷であります。さう云ふ事を言ふ人はあるが、さう云ふ事は言はないとして、そこで今信じて居るに否に拘らず宗教云ふものゝ人生に於ける意義を云ふものは、信じて居る人でなくちやならぬ云ふ事が根本であります。妙な事を言ふ様であります。今宗教を信じて居る人で…自ら稱して居る人で、人生に於ける宗教の意義を本當に知らぬ人だつてあります。宗教を信じて居るに自分で言つて居る人、自分宗教の關係は知つて居るか知らぬが、お蔭様で眼が治つたか、

齧齒が治つてさか、金が儲つたさ云ふ事は知つて居るが、人生に宗教の關係は知らぬ人があります。今現に宗教を信じて居ないけれども、人生に宗教の關係を充分によく知つて居る人もあります。そこで私は、人生に宗教の關係をよく知つて居る事が先づ必要だ。ここに依りましたならば、餘りにも人生に宗教の關係を最も高きところで考へ過ぎるが爲に、今實際信じ得られない人もあるかも知れぬ位でありますから、そのまゝ私をハッキリ申して置きます。

第二には、吾々の相手にして居ります子供の生活の中に、宗教的なものが存在して居る。持たれて居るさ云ふ事を知つて居なければなりません。——私この間京都に参りました。京都等でお寺に行く……相済みませぬが、宗教ぢやなく、宗教美術を拜見さういふ事でお寺に行く、或は、宗教のお寺に行けば人間が居なくて涼しいさ云ふのでお寺に行つたりする。所がさう云ふ積りでお寺に行きまして、大勢やつて来て居る人がある、殊にお爺様お婆様がやつていらつしやる。この善男善女に宗教が持たれて居るさ云ふ事は、直ぐ私の頭に分る。みんなは宗教的なものが持たれて居るさ云ふ事がハッキリ私に認識出来る。私は皆さんに斯うしてお目にかゝり乍ら、此處に集まられる善男善女がさうか知りませぬが……皆さんの心の中に、いさもやさしき心臓を持たれて居る事を、私はちやんこ認めて居るのであります。中には非常に強過ぎる心臓の人もあるかも知れませぬが、兎に角、心臓が、タントもないが一つ宛ある事を認めて居る。或は皆様の頭腦には優秀なる智能がある事を認めて居る。木石にあらざる事を認めて居る。或は皆様のポケットの中には、相當なお金が這入つて居ることを、じろつと睨んで居る。唯私はそれを混雜に紛れて拘らうと思はぬ丈で(笑聲)認めては居ります。

その意味から、幼稚園に来て居る子供を見て、何を持つて居るさ認められますか、幼児本能を持つて居る事を認めます。中に自發活動を持つて居るさ云ふ事を認めて居る。中には「持つて居るか？」さ着物を脱がして「何處にあるか、なければ家に歸つて持つて来い！」等と言ふ人があるが、兎に角自發活動を持つて居る事を認めて居る。道徳性も認めて居るし、或方

は非常なる藝術性のある事も認めてお出でになります。宗教的なものを持つて居るであらうか云ふ事に就て認めていらつしやるかいらつしやらないか云ふ事は、他の場合も少しく違ふぢやないか私に思ふ。何も私がお寺で善男善女を見て、持たれて居る宗教に私自身が壓迫される程に、お認めになる必要はないけれども、空つばと思つちやいけないのであります。「先生、今日は家のね、お爺さまのね、御命日でお墓に行くの、それで少し早く歸るの」云ひます時に「さうを、さうして後で御馳走があるの？」云つて了ふのは、少し認め方が足りない。何もお寺に行くから云つて、湧き上る程の宗教があるかないか別問題ですけれども、宗教なんかさうでもいゝ、歸りの御馳走を本體とする云ふ先生自身の様な心理で、幼児を解釋しては少し足りませぬ。「明日はクリスマスよ」「さうを、御馳走クリスマス……」云ふ様な、さう云ふ下等な事を言つちやいけないのであります。或はお庭に出て大きな銀杏を見て子供が「あゝ！」なんて言つた時に「大なる植物……」なん云ふ丈では困るのであります。そこには何も天地人の自然——それが濃厚にあるかさうか知りませぬが、ナチュナルレリチュアース……これを認めるかさうか、これは誰にも本能がある如く、ごの子にも宗教性があるかさうか云ふ事は理論の問題になりますが、兎に角今日の家庭と社會から宗教的なものを考へて來て居るであらう云ふ事を、その子に就ては見落してはならぬのであります。私は、その子に親がある事を忘れてやる先生が居たら餘程呑氣だと思ふ。「あらまあ、さうを？お父さんがあつたの？……今迄氣が付かなかつた。父に對する孝行云ふ事は説かうと思つて居たが、あんたがお父さんを持つて居る事は氣が付かなかつた」云ふ人があつたら、實に亂暴であります。孝行だけ教へて、その子に父がある——そのお父さんは會はない方がいゝので、會つたら實に低級なる、髭ムシヤな下等な人も知れませぬけれども——その子のお父さんがある云ふ事を認めて始めて教育が出来るけれども、認めなかつたら大變だ。けれども、そんな馬鹿な人はありますまい。だから始終父がある云ふ事を認めて「お父さん、御丈夫です

か?」か「お父さんはあんたを可愛がるだらう」か、色々その氣持でやつて居る。所がその子供が朝、天なる父よを祈をして出て来る時に、天なる父をその子を持つて居る事に就て、理窟を言ふ人は「あなたには父だらうが、私には父でない」を力むおかし。その子は、天なる父よ——幼児ですから、これ丈の深さで言つて居るか分りませぬが、まあさう云ふ考を持つて居る事を認識して居なくちやならないと思ふのであります。斯う云ふ事で、宗教教育の問題が始まるのであります。

即ち幼稚園の子供達が、宗教に關する何物かを持つて居る。勿論形に依りましても色々の區別がありますが、中には通りすがりに往來で、何時でも自分が幼稚園へ来る途中のお宮のところで人が叮嚀に拜んで居る云ふ様な事實を、何もなく唯通りすがりに見て来る云ふ程度のもありません。或は又家庭に於きまして相當に濃厚に強く宗教的なる感化を言ひますか……影響を受けて居る場合もあります。そこに色々子供の、勿論形は違つて居るのですが、その持つて居るものを、若しも吾々が人生を宗教云ふ形に於て意義あるものとして居りましたならば、そこに折角子供の持つて居りますさう云ふものを、吾々は粗末にしてはならない事になるのであります。此方から進んで、子供が持つて居ない物を、宗教教育の名に於て與へて行く云ふ様な事は、これは先刻うるさい程繰返し申上げました如く、我國の教育の建前として許されませぬ。「皆さんは知るまい」斯う云つた様な事で、自分の信仰……先生自身の信仰を子供に押しつけて行く云ふ事は許されませぬ。併し乍ら、子供自身が既に持つて居りますもの、而もそれは人生の意義に於て持つて居るを認識して居ります。その時に吾々はそれを粗末にする事は許されないのであります。その、粗末にしないで就てはさう云ふ事をするかと言へば、今丁度その子を持つて居りますものを、それを更に積極的に育つて行く云ふ事もその一つであると思ひます。併し乍ら、その積極的に育て、行く云ふ方になります云ふに、これは餘程氣をつけなければ、先刻來心配し



ました餘りに積極的な宗教教育態度にならぬことも限りませぬ。持つて居ないから言つても、持つて居る言つても、此方からグッ押しつけて行く事も、そのやり方は餘程氣をつけなければならぬと思ひます。そこでその意味に於て、粗末にしない云ふ事が二つになりまして、一つはその子供が持つて居りますそれを、もう一つ育て、行く云ふ積極的な生活を立てるのに對しまして、そこ迄は行かぬけれども、例へば青年なんかの場合には、相當積極的に行つてもいい。向ふが、積極的に積極的に行かうとして居るから、グッも行つてもいいでありませうが、其所迄は幼児に危険であると思はすれば、その幼児の持つて居りますその程度のところで、これは宗教に限らず、幼児の精神、教育盡く同じ譯でありませんが、その持つて居る程度のところで、一ぱいぐにそれを是認し、その心持を——何ぞ申しませうか。許す言ふ餘り軽い言葉であります——それを別に煽り立てたり、引伸さう主張するところ迄は、世間も何所迄も一杯に取扱つてやる事があります。そこで例へば子供が始終通り掛りのお宮で、神様につましくお辭儀をして居る人の後姿を見まして、何もなく或氣持がそこにある。その一杯の氣持のそこには、此方もそれを認めて行かなければならないのであります。これは餘程細心なる注意を以てやる可き事であると思ひます。

而も極く實際の問題として——少し失禮な言ひ方ではありますが——若し、持つて居りますものを認識しなかつたならば……無視して了つたならば、これは其所迄の事が出来ないものでありまして「さうですか、何か譯があるんでせう」か、極めて此方が下等な解釋を、宗教に下して居ります。その場合に於きましては、その子供は、その神様にお辭儀をして居る人は、どんな積りでやつて居るか知りませぬ。「あのね、毎朝若い女の人がお辭儀をして居るの」に嚴肅な顔で来た時に、先生が直ぐに「あれはね、縁談成立の爲よ」と言つてやれば、それは事實かも知れませぬが、幼児はさう思つて居りませぬ。唯そこにある宗教的な後姿云ふ様な感じを持つて居るのでありますから、その所を一杯に「さうですか」を取扱

つてやる事は、非常に必要であると思ふのであります。直ぐに又「あなたもね、後について一緒に祈りなさい。その人が幾らお賽銭をやるか見て居て、それより一錢多くやりなさい」と積極的に引張る必要はないが、宗教本質の一杯に於て取扱ふべき云ふ事は必要であります。折角持つて居る宗教的なるものを……私は言ふ。而も更に、若しそれを否定して丁ふ様な事があつたら、……それを潰して丁ふ様な事があつたら、亂暴であります。訓令はハッキリ言つて居ります。「折角幼児が家庭乃至社會に於て得たる宗教的なるものを潰すのは惜しい」と言つて居ります。誠に適切なる言葉であります。折角子供が道端の花を見て「きれいなよ」と言つた時に、先生が、「花屋に行けば幾らもある」と言つてはいけぬ事は言ふ迄もないが、宗教に關しては、一層捉まへべきところのないだけに、先生の注意は微妙になつて來ると思ふのであります。

そこで、折角持つて居るものを——これを、この材料をもこにしてぐんぐん引上げて行かう、あなたも拜んで居る許りでなく拜まれる人にならなければならぬ、と云ふ、こゝ迄やつちやいけぬが、子供の氣持を宗教の本質に於て、それを一杯に取扱ふ事をしなければいけないし、それを潰して丁ふと云ふ事は、罰の當る事であります。斯う云ふ意味で、その宗教の、子供の持つて居るものを正しく取扱ふ事は必要と思ふ。

さてその場合に、教育方法上の問題として缺く可からざる事は、斯う云ふ事柄が、如何に個人的な事であるか云ふ事は申す迄もありません。朝、子供を集めて「宗教を持つて居る者、手を舉げて見ろ。後姿を見た者、手を舉げて見ろ。何なく感じて居る者、手を舉げて見ろ」。「大多数を認める故に、さうでない者も我慢して聽け！」と云ふこんなやり方は、實に不都合、不適當であります。さうか、と云つて、持つて居る者を一人々々密室に呼んで、その子供がお寺の前を通つたと言へば衣を着て、教會の前を通つたと言へば十字を切つて、一々やり出したら大變であります。佛教指導部屋、キリスト教指導部屋

さ拵へなければならぬ。さう云ふ事でないけれども、所謂その子の個人の問題……私は、子供を集めて「家に佛壇のある人、手を擧げて御覽」なん云ふ話を聞くミツツミします。「この中にお母さんの居る人、手を擧げて御覽。お前のお母さん死んぢやつたか……」實に亂暴な話であります。家庭内のデリケートな問題云ふものは、全然秘密ぢやないが、個別的であります。心の中の問題云ふミ、子供の場合、大袈裟であります。宗教は、大人でも個人的に話す問題でありますから、幼児の場合も、個人的に取扱ふは、その子（の）さう云ふ問題に對して、よく研究して居なければならぬ。幼児の家庭を調べて、宗教が何であるか云ふ事を訊く。到底我國に於てキツバリした答は出ませぬ。先祖傳來佛教なる由、ミ書いてあるのが多いので、此方もそれをさう讀んでいゝか分りませぬが、親に會つて問ひ訊す譯ではないが、色々なコツでその事を知らなくちやならぬであります。實際家庭の事を知る云ふのは却々難しい。戸籍係ぢやないから、聞くことそのことが、さう云ふ影響を及すか云ふ事迄考へなければならぬから難しい。

私は、面白い例を最近持つて居る。友人の奥さんが病氣で寝て居る云ふ事を聞いて、みんな友達が知つて居る。さうして、さうして居るだらうミ電話をかけるが、何の病氣か？ミ言ふミ、知らぬミ言ふ。私も電話をかけた。所が世話をしして居る人が出て色々話をして、さうも「何の御病氣ですか？」ミ云ふ事が訊けない。それはお大事に、絶対安靜、へエ……ミ引下つて了つた。他の友達に言ふミ「へーお大事に、ミ言つて、君は病氣を知らぬのか……」ミ言ふが、一昨日から昨日にかけて、誰も病名を追求する事が出来ない。向ふは、病氣が病氣ですから……ミ言つて居るが、そんな事を言はれるミ尙更訊けなくなつて了ふ。さうしたら非常に上手な男が居て、うまくそれを聞きました。さうして、一寸重い病氣である云ふ事が分つた。あなた方の知らぬ人ですから言つてもいゝが、個人の病氣は、知らぬ人にも言ふ可き事ぢやありませんから言ひませぬ。そこで、その病人自身が言はない限り、聞く事は容易でないのですが、中には、自己の病氣を、

知らぬ人に迄「小生尠しく病氣相成御見舞の儀は敢て辭退致さず候」云ふ手紙を出す人もありますが（笑聲）然し普通は個人の祕密です。

さう云ふ譯で、家庭の子供の宗教なんか、取つ捉まへて親に聞く事は容易ぢやありません。然し私は聞いて頂き度い。何さか個人的に知つて居つて、宗教の傾向、宗教の心持……「あなたは日蓮宗か、さうか」それでお終ひぢや仕様がありません。あなたキリスト教か、新教——新しいね。舊教——古いね」これでは困りますので、そこらの事は分つて居なくちやなりません。

それで、個人的ではありますが、これは育て、やり度いと思ひます。私が持つて居る宗教を、その子の一生の宗教にさせる義務はありません。あなた幼稚園に来て居る時はキリスト教だつたけれども、今は佛教か」言つてもちつとも構はぬのであります。私達の方で別に責任を背負ふ譯ぢやありません。今持つて居るものを育てる。「私が斯う云ふ信仰になつて居る。あの時違ひますが、あの時の信仰を素直に育て、下さいました爲であります」云ふ事も有り得るのであります。教會やお寺迄は、其所迄は行かうと思いますが、學校ではそこ迄はしません。けれどもそこはそこで、個人的に大事にして行く。これは非常に大事な事だと思ふのであります。

私は又餘計な事を一つ思ひますが、心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養すればそれでいゝんだらう云ふ様なやり方でなく、それはそれですけれども、その中で、一人々々にはそこ迄チャン／＼／＼、あなたの心臓の鼓動の数は幾つ、ノルマルだ、云ふ他に、あなたの脈の搏ち方は強い弱いまで知つて居るお母さんと同じに、先生が子供の心の問題に迄觸れて来る、幼稚園に或しつゝりしたものが出て来るのであります。同時に、若し人生に於ける宗教云ふもの、價値を認め、宗教的精神の偉さを、本當に偉いと思ひ、さうして人生の教育者としての教育者で幼児に臨んでいらつ

しやるならば、其方からの皆様の影響ミ云ふものが恐らくあらゆる場合に種々な教材に於て取扱はれて来るであらう云ふ事も思ふのであります。

○ 今日多くの幼稚園の先生方が、實に達識有識、有識有達識でいらつしやるのであります。ここによりましたならば、日本人全體の通有性の名に洩れずして、宗教的事實の歴史的價值なんミ云ふものに就ては餘りお調べになつて居ない方も、多いかと思ひます。日蓮上人、これは偉いもんだぜ、うんミ來たつて刀が折れる、日蓮上人を信じれば佐渡の島にも渡れる、ミ云ふ事は知つて居るでせうけれども、ミこが本當に偉いか知らぬ。親鸞上人は他力ださうだ、樂だぜ、任して置けばいゝと言つた、ミ云ふ様な事で、何所が本當に偉いか少しも御承知なかつたならば、私はさう云つた文化が皆様の教育の中にさう入つて来るかミ云ふ事に就て問題だと思ふ。

學校の生徒が關西に旅行します。さうして、京都だの奈良のお寺様を見物します。その時に、色々な事を言つて居りますが、お寺に行つて、これが何宗だミ云ふ様な事は無頓著な連中が澤山居るのであります。吾々立派なお屋敷を拜見すれば、これは誰方ですかミ卑しい程訊く。誰でもいゝぢやありませんか、松の工合、岩の工合、いゝぢやありませんか、庭を見に行つた筈なのに、「誰のですか？これだけの物を持つて居れば相當の値段で御座います」ミ直ぐ訊くのであります。それで居て、お寺の主人を知らぬのであります。何でも、唯お寺ミ言ふ。それが何宗であるかを知らないから、その人がお参りして居る氣持がちつこも分りませぬ。みんなが一列に郵便切手を買つて居る時には、何處で買つて居ても同じです。中央郵便局だらうが長崎の郵便局だらうが北海道の郵便局だらうが、中野のちつぽけな郵便局であらうが、三錢、二錢、四錢の切手を買つて居る丈であります。けれどもお寺に參つて居る時は、みんな違ふのであります。中には「何處で

もいゝよ、便利な方がいゝよ」こ郵便切手でも買ふ積りで行く人がありますが、自分のお寺でなければ、行く譯がないのであります。これが宗教の特質でありますが、その所が分つて居ない。ですから、宗教の取扱ひ方が正しく行つて居ないのであります。人類の生産した偉大なる文化云ふ、この尊いものゝ取扱ひ方として、教育者の不用意さ云ふものは、大きな問題と思ふのであります。けれども、皆さんが直ぐそれを御研究になつたから云つて、幼稚園ですから残念乍ら皆さんの蘊蓄を傾ける譯に行かぬ。桃太郎でもあるまい、金太郎でもあるまい、親鸞、法然比較論をやるからその積りで聽いて居ろ、云つた様な譯に行きませぬ。ですから、蘊蓄を持つていらつしやるが、それは言へないんです。けれども私は、幼児に富士山の美を説く人、淺間山の美を説く人、十和田湖の美を説く人、箱根の湖水の美を説く人、それ等が、矢つ張り相當なところ迄知つて居なければ説けないと思ふ、「それはね、アルプスの山でも、富士山でも、要するに高いんですから……」それは濱名湖であらうが、松江の眞珠湖であらうが、要するにこれは水が溜つてるんだよ……」——甲州の、海を見た事のない人があつて、海の話をするがさうしても子供に分らないので困つて「お前のところに鹽があるだらう、あれの擴つたものだ」云つた、(笑聲さうもその人も、東京灣を知らないんぢやないかと思ふのであります、東京灣と相模灣と大阪灣と、そこらの區別を知らないんぢやないかと思ふ。ですから、宗教に就ての一通りの知識を持つていらつしやらぬと、子供が持つて居る宗教的なるものを、一杯なるところで指導する云つても、出来ないであります。「さうも私の組にキリスト教の子供が入つて来て、御飯の前にこんな(眼をつぶる)事をする。あの子が一人居る爲に、統制が取れなくて困る、變な子でね、早く食つたらいいのに……」あれは習慣でせう、云つて了つたならば問題になりませぬ。そこには、家でやつて居るからして居るんですから、その子の生活としては淡いものですから、止せと言へば止すのでありますけれども、それが一體何であるか、これが分つて居ない、先生はその子を指導する事が出来ないのであります。

私は、こゝらに於きまして、宗教を云ふ問題を取出して來ました。幼稚園の先生方の、子供が持つて居るものを教育する爲に先生自身が先づ持たなければならぬものが殖えました事を、誠にお氣の毒に思ふのであります。これは幼稚園に限りませぬ。何處もさうであります。而も文部省令が「折角兒童が、家庭なり社會なりに於て持つて居るものを大事にしなければならぬ」と言つて居る限りは、教師は其方の事に就て研究して居なければならぬと云ふ問題になるのであります。これがまあ實に難しいのであります。中には「いや、先生の説は實に賛成する、現に私のところでもその通りやつて居る。強烈なる宗教教育をやつて居る。他の事を何もしない程宗教教育をやつて居る」と仰言る方があるが、さうかするに、その場合は、その先生の持つて居る宗教の教育は出来るが、子供の持つて居る宗教の教育は却つて出来ない場合があるかも知れない。そこを私は申して居ります事を、お聴き願つて置き度いのであります。

まあ斯う云ふ意味で、宗教教育の一般的な訓令をもにしましての問題を考へて、幼稚園を云ふ單なる、善良なる性情を涵養すればいゝ處ですけれども、文化といふものに結びついて私達の教育活動が行はれて行く時に、この問題が大きな問題になつて來る、又注意を要すべきものであると云ふ事を申上げたのであります。

然らば、さう云ふ様な、人類が歴史に持てるもの、斯う云ふ意味で要領は決つて參りましたが、その宗教的指導を云ふ事に就て、一宗一派の問題でなく、今度は人間生活そのものゝ本質としての宗教的教養の文化を基本との結びつきは、さう云ふ點に注意を要すべきであるかと云ふ内容問題に入りますが、これは明日入らうと思ひます。